

中華民国の自己像と雑誌『光華』 —中華儿女から新台湾人へ（1976-1999）—

若松大祐

はじめに

中華民国は第二次大戦後において、自己像を中国から台湾へ変えた。その際、官製の対外宣伝メディアは、どのようにして自己像の変化を整合的に説明したのか。本稿の目的は、特に『光華』という雑誌の記事への分析を通じて、この問いを解明することにある。戦後の中華民国は、自らの存在の正当性を内外に主張してきた。中華民国は対外宣伝に関する官製メディアを幾つか創設する。国際的な活動空間の確保のため、外務より「僑務」を次第に重視したこともあって、1976年に『光華』が新聞局から創刊され、以後の代表的な対外宣伝の官製メディアになった。2006年1月に『台湾光華』に改名して、現在に至る。

「我々の歴史」（ナショナル・ヒストリー）¹⁾の描かれ方に注目して、『光華』の歴年の記事をひも解くならば、中華民国における自己像の変化は次のように説明できよう。すなわち、自由中国や正統中国の中華儿女という自己像は、中国規模の時空において中国共産党という他者との比較を通じて形成されていた。そして、中華民国において民主憲政を象徴する戒嚴令解除という大事件により、いわゆる政治的民主化を実現した自己自身の歩みについて関心が向く。一方で自己探求が強まり、他方で民主化達成後の不安感や倦怠感の脱却が企図される雰囲気が続く中で、新台湾人という自己像が、台湾規模の時空に生きる「我々」を団結させるコンセンサスとして改めて提起された、と。

1) 本稿において、「我々の歴史」とは、ある人間集団が公式的立場から「我々の過去、現在、未来」について述べたものを意味する。「我々」には、近代世界の一大特徴とでもいふべき国民国家（nation state）を単位とする人間集団を、想定している。「我々の歴史」は、「我々」の過去を選抜して、現在を説明し、未来を方向付ける一連の物語であり、官製の歴史叙述である。進んで言うなら、それは「我々」が「我々」を治めうる理由を、つまり統治の正当性を過去から説き起こそうとする一連の主張である。国民統合を目的とする官製ナショナリズム（国民国家の公定ナショナリズム）は、官製歴史叙述を背景に持つ「我々」の姿（自己像）を国民に提示し、それへのアイデンティファイを要請する。

I 前後で異なる官製宣伝：『光華』で架橋する

中国中心史観に基づく従来の自己像が、どのように台湾中心史観に基づく自己像へ変わったのか。ここではまず二つの歴史観を如実に反映する文書をそれぞれ取り上げる。すなわち、蒋介石の遺囑（「蔣公遺囑」1975）²⁾と李登輝『台湾の主張』（1999）³⁾である。そして、両者を繋ぐ方法として、月刊『光華雑誌』[*Sinorama*]⁴⁾に注目し、その成立背景を概観しよう。

1) 二つの官製宣伝：冷戦・内戦型とナショナリズム型

「蔣公遺囑」と『台湾の主張』が持つ共通点および相違点を整理してみよう。共通点の第一は、どちらも中華民国の総統が書いたものという設定になっていることである。ただし、共に中華民国の宣伝機関である行政院新聞局は作成に関与していない。

第二は、共に内外に向けた官製の宣伝であることだ。広く海外の人々をも読者として想定していることは、次の文言からも理解できる。「蔣公遺囑」では、「三民主義の実践，大陸国土の回復，民族文化の復興，民主陣営の堅守は，余の畢生の志であり，実は内外の軍民同胞の一致した革命の志であり戦闘のための決心でもある」と言って，国民革命の達成を同胞に呼び掛けている。他方，『台湾の主張』では，「私が本書を『台湾の主張』と名付けるのは，私の愛する台湾の人々や情に厚い世界の友人たちに，台湾の内なる声を実感してもらい，台湾の過去と未来を理解してもらいたいからである」（『台湾の主張』，p. 19）と述べている。

第三は，両者とも自叙伝という性格を持つことである。どちらも国家全体を代表する立

2) 「蔣公遺囑」（台北，1975）は，かつて台湾の公官庁や学校などで掲げられ，暗誦が義務付けられていたため，広く知れわたって今に至る。本稿では，秦孝儀（主編）『（先）総統 蔣公思想言論総集』〔全40冊〕（臺北：中国国民党中央委员会党史会，1984）を参照した。なお蒋介石本人が作者でないことは後に判明しており，その分析には王丰（2009）がある。

3) 中国語版は，李登輝（1999）。日本語版は，李登輝（1999）。英語版は，Lee, Teng-hui, *The Road to Democracy: Taiwan's Pursuit of Identity*, Tokyo: PHP Institute, Inc., 1999, 1st ed. 本稿では中国語版を典拠とし，文章の訳出に際しては必要に応じて日本語版を参照した。書籍の成立過程は，張超英によると李登輝が日本語で口述したものをPHP総合研究所の江口克彦が文字化して日本語版となり，それを中国語へ訳出したものが中国語版となった。政治的判断により中国語版，日本語版，英語版の順で公開されたようだ。（張超英（口述），陳柔縉（執筆），2006，pp. 256-271）。

4) 『光華雑誌』[*Sinorama*]（台北：光華画報雑誌社，1976. 01-2005. 12）。2006年1月から改称して，『台湾光華雑誌』[*Taiwan Panorama*]（2006. 01- ）。本稿は『光華』の記事を引用する際，「中文タイトル，English Title，目次上の番号，発行年月」の4項目を（ ）でくくって本文に挿入した。再出時には「目次上の番号，発行年月」のみを記した場合もある。また本稿はwebsite「光華雑誌智慧蔵：1976-2001 光華雑誌知識庫」（<http://140.109.8.45/sinorama/home/>）を利用し，『光華』（中英対照版）の関連記事に基づいた。

場にある総統が、限られた文字数の中でその生涯（あるいは半生）を回顧している。すなわち、ある国家が自らの過去を選択し、自らの現在を説明し、自らの未来を方向付けており、両者は官製の歴史叙述と呼べよう。尤も、両者の背後にはそれぞれの異なる歴史観があり、ここに両者の相違点がある。

相違点について、とりわけスローガン、歴史観、自己像の三つの観点から考察してみよう。「蔣公遺囑」におけるスローガンは「国民革命の達成」であり、その内容は「三民主義の実践、大陸国土の回復、民族文化の復興、民主陣営の堅守」である。「総理」（孫文）の革命に従い、最近20年は「自由基地」で「反共復国の大業」に尽力してきたし、将来も尽力しなければならないという。ここに、清末以来の近代中国の革命を中心に据える中国国民革命史観がある⁵⁾。「蔣公遺囑」の中国革命史観は、第二次大戦後の台湾において、東西冷戦型の論理と国共内戦型の論理が絡み合い改めて形成されている。それは、例えば民主陣営（国連や米ソ冷戦）や民族文化（中華文化復興運動）という単語の存在からも判断できる。近代中国という時空の規模で、かつ自他を自由民主主義と共産専制主義という善悪二元論的な枠組みでとらえる歴史観を背後に持っている。「我々」は中国（人）である。特に中華民国の「自由基地」と呼ぶ台湾に生きるから、「自由中国」を自任している。

他方、『台湾の主張』におけるスローガンは同書の英題が的確に表現しており、民主主義国家としてのアイデンティティーの追求である⁶⁾。1980年末以来のポスト冷戦時代を背景に持ち、当時世界各地で再興してきたナショナリズムが同書へも大きく影響しているのだろう。李登輝は自らの半生を描くことを通じ、「我々」である台湾の歩みを説明する。台湾は中国の一部としてでなく、台湾として位置付けられる。それは、遡れば有史以前の原住民の時代に始まった。大航海時代、清朝の統治（主に清末）、日本の統治を経て、国民党の中華民国政権に至る台湾島の歴史である。この歴史観は、後に本省人と呼ばれる人々を焦点にしており、台湾島史観と呼びうる。「我々」は、第二次大戦までに台湾に住んでいた本省人に、戦後に台湾省以外から来台したいわゆる外省人を加え、「新台湾人」として出現した。

「蔣公遺囑」が説く中国人および中国革命史と、『台湾の主張』が説く台湾人および台湾島史は異なっており、これについてすでに多くの指摘がある⁷⁾。確かに両者の非連続性を

5) 中国国民党が三民主義を戴いて提起する中国国民革命史観には、提起された時代によって内容のずれがある。1950-75 までの蒋介石総統時代の国民革命史観の変遷について、筆者は考察したことがある。若松大祐「戦後台湾蔣中正時代的官方歴史叙述：従民主陣営到民主憲政」，曾一士（総編）『中山思想與兩岸社会文化發展』（台北：国立国父紀念館，2010），pp. 167-192。

6) ちなみに、李登輝は『亜洲的智略』（台北：遠流，2000）でも、「アイデンティティーの追求は、今後の台湾政治の発展を導く中心的な議題である」と述べている。

7) 若林正丈（2008），pp. 72-75。周婉窈（2009），pp. 290-300。若林はその多くを王甫昌の議論に拠っている。王甫昌（1996），pp. 129-210。

指摘するのはたやすい。というのも、仮に民主主義を「人民による、人民のための統治」と定義するなら（アレンド・レイブハルト、2005, p. 1）, 「蔣公遺囑」と『台湾の主張』の間に、戒厳令の解除や総統の直接選挙などのいわゆる民主化と呼ばれる出来事があり、政治体制が権威主義体制を脱却して変質しているからだ。しかし両者の違いや、両者の実は解きほぐし難い絡まりはすでに自明であっても、前者から後者への移行や連続性はなお詳らかでない。現代台湾は、「中華民国と台湾は如何なる関係にあるべきか」という問いを解決できないまま今に至っている。新しい自己像である台湾は、自らの内に古い自己像である中華民国を幾らか抱えているのである。つまり、民主化運動を前後する新旧両体制が連続性を持っている（持たざるを得ない）と言える。そこで、「蔣公遺囑」から『台湾の主張』へ至る自己像の変質過程が明らかになるのならば、私たちは新旧両体制の連続性について更に理解を深めうるだろう。

「蔣公遺囑」から『台湾の主張』には、およそ 25 年の隔たりがある。この 25 年の過程の中に連続性を見出すため、本稿は行政院新聞局の月刊誌『光華』（1976- ）に注目する⁸⁾。『光華』はまさに中華民国の官製宣伝のとりわけ対外宣伝における代表的存在であり、1976 年の創刊以来、毎月、中華民国の姿を内外に宣伝し続けてきた。それ故に歴年にわたる『光華』の記事は、中華民国における自己像の変化を、連続的に説明しうるだろう。

2) 対外宣伝と『光華』

『光華』の記事を分析する前に、まず中華民国による宣伝とりわけ対外宣伝の意味、次に対外宣伝全体における『光華』の位置について、概観してみよう⁹⁾。

第二次大戦後の 1947 年に行政院新聞局が成立し、現在に至るまで内外へ向けて中華民国を宣伝してきた。対内宣伝について本稿では言及しない。対外宣伝に注目すると、中華民国は宣伝の重点を、米国を中心にする西側諸国と北米および東南アジアの華僑とに置いてきた。とりわけ 1970 年代になると、1971 年の中華民国の国連脱退、1972 年の米中接近、1975 年の蒋介石死去、1979 年 1 月 1 日の米華断交、米中国交樹立などの大事件が続き、中華民国を取り巻く国際政治空間は大きく変化した。中華民国の対外事務は、正式な国家

8) 本稿は全部の記事を扱えたわけではなく、原則として毎年 1 月号と 10 月号の記事に注目する。というのも、この二つの月には開国記念日（元旦）と国慶節（10 月 10 日、双十節）がある故、記事内容（とりわけ「編者のことば」と「読者からの手紙」）に当時の国家の自己像が多分に反映されている、と考えるからである。

9) 『光華』についての先行研究は、修士論文が三本あるだけである。自己像の転換という本稿の関心に基づくと、1976 年の創刊から 2006 年の改称までを扱った林秀芬（2010）の研究が参考になる。ただし本稿の見解と合致しない。というのも、同論文は『光華』の記事内容の変化を、『光華』を取り巻く外在的状況によって説明している。すなわち、どうやら 1990 年頃の政治空間の本土化現象を念頭に置いて、記事内容の本土化を指摘しているからだ。しかし本稿のように自己像の背後にある歴史観に注目すると、記事内容の本土化は 2000 年頃以降のことと考えられる。

間の外交関係の欠如を補うため、経済力を背景に世界で活躍する華僑を通じ、国際空間での活動を展開するようになる。僑務をつかさどる行政院僑務委員会が重要性を増す（陳鴻瑜, 2000）。簡略化して言えば、中華民国の対外事務における外務と僑務の比重は、従来の「外務＞僑務」から新たに「外務＜僑務」という状況を迎えた。対外事務の変化に伴い、対外宣伝も僑務を重視するに至り、こうした状況下で『光華』が登場することになる。

1976年の『光華』創刊より以前、中華民国はいくつかの対外宣伝誌を持っていた。先行研究に基づくと、行政院新聞局の定期刊行物に（1）『中華民国英文年鑑』（*The Republic of China Yearbook*, 英文）,（2）『自由中国評論』（*Free China Review*, 英文, 総合誌, 月刊）があり、代表的な宣伝誌であった。ほかに（3）『自由中国週刊』（*Free China Weekly*, 英文, ニュース）,（4）『自由中国之声』（*Echos de la Republique de Chine*, 仏文, ニュース, 隔週刊）,（5）『匪情双週刊』（*What's Happening on the Chinese Mainland*, 英文, ニュース, 隔週刊）,（6）『遠景画刊』（*Vista*, 英, 仏, 独, 西, 日文等, 画報, 季刊, のちに隔月刊）,（7）『祖国一週』（中文, 華僑が対象読者）,（8）『中華一週』（中文）があった。専門誌に（9）『每週匪情通訊』（中文）,（10）『国際問題参考資料』（中文, 半月刊）,（11）『国際輿情分析』（中文, 三日刊）,（12）『国外輿情輯要』（英文, 週刊）がある。新聞局以外の他の機関の刊行物に、（13）『僑務月刊』（中文, 僑務委員会発行）,（14）『中外画報』（*The Cosmorama Pictorial*, 中文, 英文, 仏文, 月刊, 香港中外雜誌社発行）,（15）『觀光報導』,『觀光』（中文, 交通部觀光事業委員会発行）,（16）『台湾画刊』（英文, 台湾省政府新聞処発行）,（17）『台北画刊』（英文, 台北市新聞局発行）,（18）『亚洲展望』（*Asian Outlook*, 英文, 月刊, 亚洲人民反共連盟および世界反共連盟発行）,（19）『問題与研究』（*Issues and Studies*, 中, 英, 日文, 月刊, 国際関係研究所発行）,（20）『勝利之光』（中英対照, 国防部発行）,（21）『外交部声明及公報彙編』（中文, 外交部発行, 主に在外公館へ寄贈）があったという（周明義, 1970, pp. 25-26。林秀芬, 2010, pp. 22-23）。

様々な対外宣伝誌がすでに存在する中で、なぜ新聞局は『光華』を創刊したのか。「新聞局が光華を扱うことになったのは、どうやら偶然のことでもある。当時の政府には三つの刊行物があり海外に向け発行していた。すなわち軍の『勝利之光』, 台湾省政府の『台湾画刊』, 台北市の『台北画刊』の海外版である。行政院はこの三種を統合して対外宣伝を行い、労力や物資を節約せよと命令を下した。各部署は互いに押し付け合ってその重責を担おうとせず、新聞局に対策を共に講じようとする。解決策が見つからない。ある時、行政院長の蔣経国は新聞局へ巡視すると、ちょうど上記の各部署が協議していたため、〔蔣は〕その場で裁定を下した。すなわち、海外向けの宣伝は新聞局の業務である。協議する必要はない。新聞局が主管するのだ、と言った」（光華講古：我們就是這樣長大的；*The People Who Shaped Sinorama*; 003, 1996年1月。〔〕は引用者による註であり、以下同様）, と『光華』は回顧している。政府は従前の海外宣伝誌を再編し、1976年に『光華』を公刊したのだった。

『光華』の概要は、公式サイトによると、「新聞局が出版する国家の雑誌であり、1976年に創刊されて、今や三十年の歴史を持つにいたる。光華は中英対照版だけでなく、1980年から1981年の間に中日対照版、中国語－スペイン語対照版を新たに加え、1986年には米国で約1万冊を購読する人々へのサービスを強化するため、ロサンゼルスに「米国光華出版社」を設置した。また各地の読者の要望は同一でないから、1986年9月と1989年2月とに「北米版」と「東南アジア版」とをそれぞれ立ち上げて、「国内版」と区別している。（…中略…）光華雑誌は台湾における現況や台湾における国際化の理念をしっかりと報道するために、民国九十五〔2006〕年一月、正式に改名して『台湾光華雑誌』（*Taiwan Panorama*）となった」¹⁰⁾。1980年代には、従来の中英対照版に別の版が新たに加わっており、ここに当時の中華民国の対外宣伝における僑務重視という傾向をうかがえる。東南アジアは世界の中で華僑・華人の最も多い地域であり、中華民国に対する彼らの支持を取り付ける上で重要な宣伝対象であった。また、米国への宣伝には、上述した*Free China Review*や*Free China Weekly*の英文誌が1950年代から存在していた。米華断交に伴い、中華民国は華僑経由での外交をも展開することになるから、北米の華僑は重要な宣伝対象であった。

『光華』創刊号の「まえがき」は、「海外に向けて中華民国の様々な動きを報道するこの光華画報が、遂に中華民国65年（1976年）の始まろうとするこの時、読者の皆様とお目にかかります。多方面からのご意見やご期待を受け、我々は、より素晴らしい画報で海外の読者へ総合的な報道を行うべきだと考えるに至りました」（写在前面；001, 1976.01）と述べる。こうして、『光華』はポスト蒋介石時代の中華民国における代表的な対外宣伝誌として登場した。

II 自由中国の中華儿女：他者との比較

「蔣公遺囑」（1975）が掲げた自由中国という自己像は、蒋介石を継いだ蔣経国の時代にあつてどのように表現されていたのか。ここでは『光華』創刊から戒嚴令解除直前までの記事を対象にして、『光華』という官製宣伝の掲げる自己像の特徴を考察する。

1) 自由中国の自強

自由中国という自己像は、中国革命史観に支えられていた。この歴史観は、民主主義陣営に所属するという東西冷戦型の論理と、民族文化を重視して仁政（孟子の「民を貴しと為す」）を実現するという国共内戦型の論理とで、中国国民革命の正しさを説き、自由民主という自己像を保証しようとしていた。だが1979年1月の米華断交により、自らの民

10) <http://www.sinorama.com.tw/about.php> (2012/01/08 確認)

主陣営への所属が主張できなくなり、東西冷戦型の論理はひとまず消える。そこで、自己像は国共内戦型の論理のみで形成されることになる。(民主と自由という二つの理念が混同して使用されている点について、本稿では指摘するだけにとどめておく。)

蔣経国は米国から米中国交樹立の予告を受け、近く到来する米華断交こそは「我が中華児女が(…中略…),最大の決心と力量を持ち出す時である」と訴える。最大の決心とは、「全て自分を待み、自由と生存のために敵である共匪と戦い尽くす」ことである。最大の力量とは、「皆が冷静沈着であり、民族の正気を発揚し、精神的な武装を強め、真心で団結し、政府を支持し、徹底的に奮闘すること」である(蔣経国, 1978, pp. 24-26)。中華児女という自己像は、ナショナルな理念を重視する国共内戦型の論理を背後に持ち、自立自強(自力更生)を志向するものになっている。

『光華』は米華断交に際し、「蔣総統は、反共国策は絶対に変更しない。如何なる状況下でも、絶対に中共と和議を結ばない、(…中略…)我々の現在の反共復国の戦争は、民主を争い、自由を争う三民主義革命の連続であり拡充であり、一連の歴史的な本質と時代の要請とを備えている。敵が異なるといえども、時代背景が異なるといえども、民主と極権[全体主義]、自由と奴役、仁政と暴政という戦争の性格はやはり一致している、と改めて表明した」(断交、震怒、抗議 自信、団結、奮励; Heaven Helps Those Who Help Themselves; 001, 1979. 01)と、伝える。ここでは民主、自由、仁政の追究を三民主義革命としてまとめ上げ、漢賊並び立たずという国共内戦型の論理で「我々」の正しさを主張している。

革命に従事する「我々」が持つ態度は自立自強であり、『光華』は革命史によって自立自強の正しさを証明しようとする。「辛亥革命に至るまでの九度の失敗は、民主の望みをほとんど断ち切っていた。軍閥の割拠も、国家の統一をほとんど不可能にしていた。そして日本帝国主義の理不尽な侵略で、もはや我々はほとんど国を失い民族が消えつつあった……。しかし、我々の国民革命は、少数で多数に打ち勝ち、弱きで強きを制し、危険を安全に変え、不可能を可能にしてきた。すべては奇跡でない。我々の国民革命は、時代の潮流に適合していたのであり、人民の要望に合致した革命であった」(001, 1979. 01)と。

また自立自強は素朴に尽力することで展開されるものとして位置付けられ、『光華』はそれを蔣経国の人柄に託して述べる。1979年10月号は大量の紙幅を使って、「我々中華児女」を代表する人物である蔣経国について紹介する。曰く、「我々の総統である蔣経国先生はかつて次のように言っている。『私の人生哲学はとても簡単であって、それは全力を尽くし、国家や同胞に対して有益なことを行うのである』と。(…中略…)経国先生とはこのように平凡の中で立ち現れる非凡な人である。彼は大きな道理を説くことを好まず、ただ終始一貫して奉仕し貢献しようとするのみである」(出於衆恒居於衆平凡中見不平凡: 蔣経国総統帶領我們重重奮闘, 歩歩求勝; President Chiang Ching-Kuo: A Great National Leader; 005, 1979. 10)。『光華』は平凡という概念を使い、蔣経国というリーダー

に備わる国民目線を強調する¹¹⁾。中華児女という上から目線とは、方向が少し異なるようだ。超絶した総統が子供を率いるのではなく、平凡の中から出現した総統が人々と共に歩むと言わんばかりである。

もちろん『光華』の伝えるのは、蔣経国の新しさ（断絶面）だけでない。「蔣経国先生は〔かつての〕総統 蔣公を確かに継ぐ人である」（005, 1979. 10）と言って、前の時代を踏まえた継承者という側面（連続面）を伝えている。

蔣経国というリーダーによって、「我々」は自力で実際に何をなすべきか。『光華』は、「経国先生は国防工業についてこれまで一貫して重視してきた。というのも我々は国家の安全を確保しなければならず、そうしてこそ始めて進歩や発展を論じることができるからである」と述べる。ここでは、大陸への反攻よりも、国土（台湾）の防衛に重点が置かれている。中国共産党による台湾の武力解放を想定しなければならない当時の状況が、前提になっている。こうした前提を踏まえ、『光華』は近代化を「我々」の目標として掲げる。すなわち、「我々が信じているのは、経国先生が思慮を尽くす企画推進の下、十二項建設は必ずや順調に完成し、我々の国家建設がさらに堅実かつ安定した基礎の上で、近代化を目指す方向に大きく進むことである」（005, 1979. 10）と。

2) 現代的な中国人

1979年の米華断交に際して改めて立ち現れた「我々」は、中華人民共和国の存在を常に念頭に置き、それとの比較で自己の優位を説き、自強自立で民主を追及しようとしていた。そこで、「我々」は他者を強く意識する性格を持つ自己像であると言えよう。

中華人民共和国が1971年に国連での中国代表権獲得し、1979年に米中国交樹立した。これにより、国際社会において中華民国の中国統治の主張は認めらなくなり、さらに台湾統治の現実まで疑問視されるようになる。特に台湾統治については、台湾島内に党外人士という反対勢力が遂に出現し、中華民国政府に憲法機能の正常な実施、中でも台湾島規模の選挙による台湾島規模の代表者選出を訴えた。中国大陆からと台湾内部からの二つの批判に対して、中華民国政府は、一方で中国が台湾海峡で分裂する前の1947年制定の憲法を機能凍結ながらも維持することで、たとえ形式的だとしても全中国国民による憲法の創出という手続きを根拠にして、台湾統治を当然含んだ上で中国統治の正当性を主張する。同時に、いま一方でマルクス・レーニン主義および毛沢東思想がでなく、三民主義こそが中国統治に適切であると内外に訴えるために、三民主義模範省として台湾省で民主憲政を実現すべく、その前提作業として安定した社会の建設に取り組むことで、憲法機能を凍結

11) 平凡の中に非凡を見出すのは、蔣経国の思想である。彼は『風雨中的寧靜』（蔣経国, 1967）という著作の中で、蒋介石を「一位平凡的偉人」（ある平凡な偉人）と形容し、章題にしている。

したまま、台湾島での民主憲政の実現の様子を主張する¹²⁾。民主憲政の内容に台湾島での国家建設を充てるという考え方は、『光華』の記事に直接表れていない。けれども、恐らく『光華』の背後に存在していた。それ故に、『光華』は蔣経国による国家建設を称賛し、「我々」が民主憲政たることを主張するのである。政治的な事柄で「我々」の民主たるを宣伝したわけでない。

国家建設で自他の優劣を争うなら、中華人民共和国で1978年末に始まる改革開放の動向は見逃せない。『光華』の1985年1月号は、台湾海峡対岸の政治的な議題を報道する。「十二月には、『人民日報』が『マルクス・レーニン主義』は中国大陆で適用しうるか否かについて、幾度か提起した。国際的にさまざまな推測があったし、我が国の反応が多くの人々の注目の的にもなった」（編者的話；001，1985.01）という。同じ号の別の文章で、このような議題に関係する『人民日報』12月7日付の評論やその後の修正に対して、「中国国民党主席蔣経国先生は十二月十二日に談話を発表した。自由世界の人々に警戒を強め、中共の文字のゲームに欺かれないように、呼び掛けた」（反馬列不行，不反馬列也不行—透視「人民日報」的自白；016，1985.01）と伝える。『光華』は蔣経国に借りて中華人民共和国の統治能力をいぶかしむことで、中華民国の統治能力を肯定し、三民主義による中国統一を宣揚したのである。

そもそも「我々」のあるべき姿として提起される近代化とは、いかなるものか。『光華』は、「読者からの手紙」の欄で、米国在住の蔡氏からの手紙に対して次のように答えている。「本誌は今後、我が国の近代化への促進について報道するだけでなく、固有の倫理道徳や思想文化……の伝承や宣揚への取り組みについても報道する」（読者来函；015，1983.01）。『光華』によれば、近代化の促進と固有文化の宣揚とは併存するものとして理解されている。

1986年、『光華』は1月号で「中国人イメージ」という特集を載せる。「今号の巻頭特集である『中国人イメージ』は、さまざまな角度から外国人および自国民の目に映る『中国人』の特徴を調査する。こうした特徴は、往々にして海外華僑が居住国で受ける待遇に影響するし、また間接的にであれ我が国の国際的な政治経済活動にも影響する」（編者的話；Editor's Note；002，1986.01）と述べ、特集を企画した理由を説明している。

確かに目次のページには、「現代中国人のイメージはすでに『傳満洲』の束縛から脱却した」（目録，1986.01）という文字が見える。傳満洲とは、かつて西洋人の目に映った中国人像である。つまり、禿げ頭でずるがしこそうなイメージであり、黄禍論をも想起させる。では新しい中国人イメージはどうか。『光華』は調査結果に基づき、次のように言う。すなわち、「アメリカ人の日本人に対するステレオタイプをいえば、1940年以前に『聡明、勤労、進歩』だったものが、二次大戦後には『不意打ち、裏切り叛逆、ずるがしこく狡猾、

12) この部分については稿を改め丁寧に議論する必要がある。本稿では対照的な文章を二つ挙げるにとどめたい。（康寧祥，1978，pp. 159-164），（蔣経国，1980，pp. 176-186）。

『極端なナショナリスト』に変わってしまった。逆に中国人に対するイメージは、『迷信、ずるがしこく狡猾』から『伝統を愛し、家庭に対して忠実』に変わっている」（中国人的形象；The Chinese Image；003, 1986.01）と。

そもそも、『光華』はなぜ「中国人イメージ」について調査したのか。『光華』は経済学者の高希均の話を取り上げて、調査目的を説明する。「目的は二つある。積極的には、中国人が困難な環境の中で、台湾において一つの繁栄し、進歩し、自由な社会を作り上げたことを、世界各国に知らしめることである。消極的には、世界各国が我々に対してサンプリング・バイアスを持っていることを明白にすることである。『こうした誤りは、恐らく政治的（例えば戒厳法）、経済的（例えばコピー商品）、社会的（たとえば不衛生）なことに由来している』（003, 1986.01）と。要するに『光華』は、古臭く、立ち後れて、野蛮だという中国人イメージが今や改まった。明晰で、現代的で、礼儀正しいという中国人が中華民国に存在している。中華民国は台湾で、経済建設、民主政治、固有文化の自由国家として存在する、と強くアピールしたのである。

こうした現代中国人のイメージは、西欧（西側諸国）に通じるようにモダナイズ（近代化）されている。この自己像は、あくまでも敵対する中国共産党政権（中華人民共和国）という他者を念頭に置き、近代性の具備を根拠に自己の優位を主張して、形成されている。そこで米華断交後、1980年代に官製メディアが宣伝した「我々」は、他者を強く意識する性格を持つと言えよう。この自己像の下では、国家の象徴でもある総統府すらも、中華と西洋との融合として表現されるに至る。もちろん日本による建設という説明はない（全民族的精神堡壘—総統府；The Presidential Building, a Symbol for the Nation；001, 1982.10）。

要するに、『光華』発刊からの10年間における自己像の特徴は、自由中国に生きる中華儿女と呼びうる自己像が近代的であろうと志向していること、そして自己像のこうした性格が中国大陆（中華人民共和国）という他者との敵対的な比較により形成されていることである。

Ⅲ 戒厳令解除：自己の内部での模索

1987年の戒厳令解除が民主化の大事件となり、中華民国の自己像は民主中国として積極的に宣伝されるようになる。本節では戒厳令解除直後の『光華』の記事を対象にして、そこで提示される自己像の特徴を考察する。

1）民主化に伴う新たな課題の出現

戒厳令解除は政治の民主化にとって画期的な出来事になる。1986年10月7日に蔣経国が戒厳令の解除を予告し、1987年7月15日に戒厳令は解除された。1987年、『光華』の

同年1月号は強い論調で、「戒嚴令の解除と結社の自由とは、『中華民國の四十年來の最大の政治変革である』（目録，1987.01）と述べる。ただ、「政治的な民主化は、そもそも政權与党の目標であったし、共產主義に打ち勝つための最も有力な武器である」（中国民主化的新里程；A Milestone in China's Democratization；002，1987.01）とも言う。『光華』は、政治的民主化の実現を、他でもない「我々」自身によるものとして強調する。反対勢力の異議申し立てのために戒嚴令が実現した、とはもちろん言っていない。

ここで自由中国という従来の自己像は後退し、（戒嚴令を解除した台湾規模の）中華民國そのものが自己像となっている。これ以降、『光華』は政治に関して自らの民主たるを強調し、中華世界の先駆けや開発途上国の模範を自任する。中華民國の政治的民主化が華人世界全体に持つ意義を、『光華』は誇らしげに主張する。すなわち、「香港『時報』は『政治制度改革の先駆者』という題目で、中華民國が台湾地区でなしとげた政治的な発展は、世界の五大華人地域—中国大陆、台湾、香港、マカオ¹³⁾、シンガポール—の政治制度改革の先駆であり参考にすべき経験である。他の華人地域のために参考材料としてふさわしい。『政治革新』は最近ブームになっている話題であるから、本誌は特に巻頭特集とした」（編者的話；Editor's Note；001，1987.01）と。更に、中華民國の民主化の意義は華人世界のみにとどまらない。「中華民國はまさにアジアにおいて発展が最も早い国家の一つである」（003，1987.10），と『光華』は表現する。また、「疾駆する中で、教育の普及、経済の成長、政治の開放……，中華民國は広く認められた『開発途上国の模範』になった」（成為典範之後；After Becoming a Model of Development；002，1987.10）とも言っている。

しかし、すべてが円満解決というわけではない。民主化に伴い、様々な問題が新たに浮上したからだ。確かに、『『ニューヨーク・タイムズ』の社論は、国民党のかかる政治的自由化の改革が『見通しが明るい』と展望していた（編者的話；Editor's Note；001，1987.01）。けれども『光華』は決して楽観視せず、「東洋における変遷や発展は短い時間で起こったから、成功と挫折が同時に沸き起こった。つまり、西洋の資本主義が百年、二百年をかけて発展したので、成功をまず享受して、それから課題が次第に発生したという場合とは、異なっている。（…中略…）難題の一つは、民主の基盤がしっかり固まっていない土地に、どのようにして真の民主の花を植えて咲かせるか。つまり、いかにして『汎政治』〔何事をも政治と結びつけること〕を避けるかが、大きな挑戦〔すべき課題〕なのである。民主を要するなら、法治をも要しなければならない。『民主のもう一つの側面は、法治である』（驀然回首談挑戰；A Glance Back to Meet the Challenges Ahead；003，1987.10）と指摘する。つまり、『光華』は民主の実践に際して、個人の自由の追求を承認

13) 原文は五大地域の一つに「廈門」（アモイ）を挙げている。ここは「澳門」（マカオ）が正しい。そもそも、この個所の英訳も、“the five great areas in the world where Chinese live-mainland China, Taiwan, Hong Kong, Macao, and Singapore”となっている。

すると同時に、国家の秩序の遵守を国民に呼びかけたのである。「ここに、多くの事柄が浮き彫りになり討論されることになった―。教育や経済の発展を背景にして、相当な知的水準を持つ中産階級、そして物怖じせず発言する学者や専門家が生まれている―。課題は山積みだろう。実は、議論はもう始まっている。注目され始めてもいる。解決策も出され始めている」(003, 1987. 10)。『光華』は民主政治に大きな期待をかけつつも、社会の混乱を恐れているようにみえる。

「我々」の基盤について、『光華』は識者に借りてその空疎な状態を伝える。米国の世界日報総社（聯合報系の新聞社）の副社長である張作錦は、第二次大戦後の台湾生まれの世代を「歴史的感覚のない世代」というふうに表現する。張によれば、「台湾生まれの世代は歴史的な断絶により、心が拠り所を見つけれない！」そして即効性や実用性ばかりを追求してしまうという（003, 1987. 10）。

この原因について、『光華』は蕭新煌の分析に基づき、「我々はたしかに台湾で生活している。けれども台湾そのものの文化が重視されてこなかった。加えて、幼少からひとまとまりの広範かつ抽象的な中国大陆の観念を教えられてきた」からだと説明する。こうした中国大陆のイメージについて、ハワイ大学で博士号を取得した黄瑞祥は、「台湾で生まれ育った世代は往々にして、書籍の中からだけでイメージを得ている。『加えて、中国大陆に関係する情報の出所は限られていることが、我々を中国からさらに遠ざけてしまい、自らのものを持たなくなった』」（003, 1987. 10）と分析しているという。つまり『光華』によれば、当時の中華民国は「自らのもの」を実はしっかり持っておらず、またそれが「中国的なもの」とも違うかもしれないという感覚をも持ち始めていたようだ。

『光華』は、「台湾地区で生活する中国人の将来的な身体の変化は、もちろん世界の潮流と共にある。―例えば流行があらへ進むなら、身体もあらへ向けて変わる」（中国人的身材；The Chinese Physique；008, 1988. 02）と言う。中華民国の自己像は揺れ始めていた。

2) 自他の再設定

民主化が契機になり、中華民国の自己像はその内容を再検討し始める。台湾人という概念を自己像の中心に据えるようになることは、すでに多くの指摘があるし、何より歴史的事実である。ただ、『光華』は海外華僑を読者に設定していることや、中華民国を宣伝することを任務にしてきた。だから、自己像の変質に対する躊躇が『光華』の記事には多少見いだせる。

自己像の揺らぎは、『光華』自身に現れていた。『光華』は自らの十五周年を祝う際に、積極的に「台湾社会」という概念を使って自国の社会を再定義している。「次の十五年を邁進するに、『光華』は読者の皆さんのために、台湾社会のダイナミズムを反映し、海外華人社会の変遷を記録し、中華文化の精髓を伝えよう」（編者的話；Editor's Note；002,

1991.01)。すなわち、『国内のダイナミズム』、『伝統文化』、『海外報道』を三つの重点として、内外の華人の相互交流を主旨にし、真に『台湾に立ち、中国大陆を思い、世界に目を向ける』国際的かつ総合的な刊行物となる」(成長、是如此喜悅……—光華歡度十五周年; Growing Up Can be Joyous—Sinorama's Fifteenth Anniversary; 003, 1991.01) ということ、『光華』は編集方針として再設定したのだ。

「我々」の内容は、台湾に生きる人々が中心になった。初の総統直接選挙の直前の様子を『光華』は、「個人の理念がばらばらなのは元々予想できた。これを換言すれば、台湾は確かに多元化¹⁴⁾した民主社会なのである。出身が貧しかろうが、名家であろうが、本省人であろうが、外省人であろうが、誰でもみな総統を選ぶチャンスがある」(総統候選人的少年時代; Portraits of Potential Presidents as Young Men; 013, 1995.10) と指摘している。初の総統直接選挙を終えて、『光華』はこれを民主的な一大イベントとして伝える。「中国人の世界において、自由や民主や人権が、繁栄や安定としっかり共存できることを証明した。台湾の二千一〇〇万の人々と海外から帰国して投票する多くの華僑とがだけでなく、世界各地からのメディアを通じて、数えきれないほどの全世界の観衆や読者もが、ここで歴史に刻まれることになった選挙を見事に見届けたのである」(民主的序幕; A Prelude to Chinese Democracy; 002, 1996.04)。歴史の証人は、何よりも選挙権を持つ人々であった。

なお、「我々」の自己像は(とりわけ政治的側面では)「台湾」でなく、あくまでも「中国」であるようだ。『光華』は総統直接選挙について、「しかしながらこれは民主中国の序幕に過ぎない。我々の立つ台湾から、多くの作業を始めなければならない」(民主的序幕; A Prelude to Chinese Democracy; 002, 1996.04) と主張している。ただ、同じく自己像と言っても社会経済的側面では「台湾」を使い、文化的な側面では抽象的な中華文化と具体的な台湾民俗とを並べて表現する傾向があり、まさに自己像が揺れていた。

「我々」の中には台湾に生きていないけれども、中華民国(または台湾)と深い関係にある人々がいる。すなわち華僑の人々である。『光華』は、当時の台湾が基本的には華僑に対して親密な感情を持っていることを伝えている。時に、海外華僑の異郷での生活を積極的に理解し報道しようとする程である。これは海外華人が『光華』の重要な読者だからであり、恐らく彼らが頻繁に「読者からの手紙」の欄に登場していたからかもしれない。同じく台湾の外である中国大陆に生きる人々への冷めた感情とは、あたかも対照的である。

1993年には、『光華』が10月号で海外華僑の特集を組む。『光華』は、「双十国慶式典で英雄の凱旋のように歓迎されたのが、卵を投げられる事件が発生するまでになった。国民の目に映る華僑の地位は変わってしまったのか?」(目録, 1993.10) と問題提起する。

14) ここでの多元性は恐らく、直接的にはさまざまな社会階層からの政治参与という意味であろう。1990年代後半から台湾の中央政治で議論になる社会や文化の多様性ではない。

民主化と本土化（台湾化）が進み、中華民国国内では海外華僑に対する優遇政策について批判の声が挙がっていた。

当時の台湾における華僑の問題とは、すなわち「中華民国の政治が民主化し、本土化すると、華僑に対する国民の『心』も変わってしまうのか？それぞれの『華僑のエスニック・グループ』に接するとき、国民は一視同仁の態度で臨めるのか？あるいは『遠近』の区別をするのか？」という問題である。『光華』は世論調査に基づき、「『華僑』とは老僑、台湾新僑、大陸香港新僑等の『エスニック・グループ』というように定義する」¹⁵⁾。更に分析して「言うまでもなく国民の心には、海外の炎黄の子孫に対して同族意識がある。しかし『四海之内、皆兄弟』^{せかい}と言っても、やはり遠近の区別はある」という。調査の結果は、「42%の人が、台湾新僑と我々との関係が最も密接だと考えている。老僑を挙げた人々（22.9%）がこれに次ぐ」。そして、「これは、台湾の近年の本土意識の抬頭と呼応している。ただ、台湾新僑以外は全て我々と無関係だという程度までは至っていない」（其實你不懂我的心——民意看華僑；You Don't Understand Me, Do You? The Popular View of the Overseas Chinese；004, 1993.10）と結論付ける。

同時に、『光華』は華僑側の台湾に対する幾らかの不満をも伝えている。例えばアメリカ在住の方氏という読者は、「本当に、一人の『台湾人』になるのは本当に難しい」（読者来函；Letters to the Editor；001, 1993.10）と嘆く。同じくアメリカ在住の Wu 氏という読者は、もっと強い論調で、「私は自分が中国人であるとずっと考えているし、台湾で生まれたことを誇りに思っている。（…中略…）簡単に言えば、私は現在の台湾の状況に対してすごく失望している。私の望むのは、同じ民族、同じ肌の色の人が本当に団結して心をつなげて、次の世代のために偏見や無知のないより良い環境を作り上げることである」（読者来函；Letters to the Editor；001, 1994.01）と主張を展開している。

総じて言えば、『光華』は華僑を（遠近の区別があるとしても）やはり「我々」の一部と看做している。逆に「我々」の一部と看做さなくなったのが、中国大陆の人々である。例えば、「大陸新娘」（中国大陆から台湾へ嫁ぐ花嫁）に関する記事がある。『光華』は、「中国大陆の配偶者を外地からの移民とするのか、自国民とするのか。これは政府にとっての難題の一つである」と問題提起していた。総統蔣経国が晩年の1987年に、台湾側の住民（最初は主に今や高齢になった中国大陆出身の元軍人）による中国大陆への渡航および親類縁者訪問を解禁した結果、中国大陆の配偶者（主に女性）を持つ台湾人が出現し始めたのである。

『光華』が官製宣伝として出したのは、「政府は一貫して『一つの中国』という政策を維

15) 老僑とは1949年までに（台湾と関係なく）中国から海外へ出た人々を、台湾新僑とは1949年以降に台湾から海外へ出た人々を、大陸香港新僑とは、1949年以降に中国大陆や香港から海外へ出た人々を、それぞれ意味する。なお「族群」を「エスニック・グループ」と訳出した。

持してきた。(…中略…)そこで台湾海峡兩岸が尚も対立している時は、大陸の人々は『自国』の国民であるけれども、その來台を制限しなければならない」という回答である。ただし、「しかも中華民国の法律では規定がないのに、大陸の同胞と結婚してはならないのだ!」という疑念の声をも記載している。『光華』は一人の若い漁師の疑問を紹介する。「幼少のころから我々は大陸の同胞を救助する〔と教えられてきた〕のでなかったのか?実際にやってみたら、かえってダメだとは?」これは、非常に皮肉な記載であった。だが、すでに台湾における人々の意識は変わっていた。中国大陆を、「言語は通じず、文化は異なる!こうした感覚があつて、更に台湾海峡兩岸の四十年間にわたる隔絶があり、社会制度も異なるのでは、衝突の可能性は更に増してしまう」(大陸新娘過台湾; Here Come the Mainland Brides; 008, 1992.10)と看做すようになっていたのだ。同号の別の文章(誰に大陸結婚?; Who Goes to the Mainland to Marry?; 009, 1992.10)では、中国大陆の人々を、台湾の「我々」が付き合えない人々として表現している。当時の台湾がすでに自らと大陸の間に一体感を失っており、それもやむを得ないという雰囲気は『光華』は伝えてくる。

民主化に伴い、政治、社会、文化、環境などの各方面で新たな課題が浮上する。このような課題に直面することを通じて、「我々」は自らのあり方を反省し、「我々」の内容を再設定するに至る。そこで戒厳令解除の後、1990年代前半に官製メディアが宣伝した「我々」は、自己を強く意識する性格を持つと言えよう。この自己像の下では、台湾での民主化を「我々」のものとして絶賛する一方で、それへ参与できなかった人々(主に海外華僑)をいかに包摂するのかという難題が残った。

要するに、戒厳令解除から1990年代中ごろまでの自己像の特徴は、民主化の達成に至るまでのプロセスへの内省が生まれ、自己像は自己を強く意識して形成され始めたこと、そして、民主化への参与の有無が「我々」であるか否かを決めるようになったことである。

IV 新台湾人：新しいコンセンサスの発見

1987年の戒厳令解除をきっかけにいわゆる民主化が進み、1996年には総統直接選挙が実施される。同時に、台湾の社会は不安定感をも持っていた。ここでは1990年代の『光華』の記事を対象にして、そこで提示される自己像の特徴を考察する。

1) 新人類と新台湾人

中華民国は、1970年代に始まる国家建設(経済)、1980年代後半に盛んになる政治的な民主化(政治)があり、文化復興や文化建設もあり、1990年代前半には民主中国としていわゆる近代的かつ多元的な社会を台湾規模で構成するに至った。『光華』によると、「経済の発展や教育の普及のおかげで、台湾にはたくさんの『お金持ち』が生まれた」(走出

移民陰影 ; Emigration Steps Out of the Shadows ; 008, 1990. 10)。そればかりでなく、台湾は「新新人類」なる人々をも生み出したという。『光華』は、「豊かな物質、開かれた社会的な雰囲気」が、移り変わりが速い中で台北に、『都会的で流行の』という新しい世代を作り出した」（目録、1994. 10）という背景を挙げている。

「新新人類」なる人々について、『光華』は次のように解説する。すなわち、「台湾で、とりわけ一九七〇年代以降に生まれ、冷戦後期の世界経済の著しく発展する雰囲気の中で育った『新新人類』が、一九八〇年代末から次第に社会の片隅に出現するようになった。莫大な消費力によって、彼らは広告会社の寵児となる。また『伝統的な人類』の生活態度や価値観と異なるから、家庭や学校や職場での伝統的な倫理観やコミュニケーション方法へ次第に衝撃を与えるようになる。（…中略…）一つの解釈によれば、その存在はタブーからの解放や、自我の目覚めを意味するけれども、不確実で曖昧な世代でもある」と。さらに「『新新人類』は一体何を考えているのだ、と李登輝総統がひどく嘆いて言うのも無理もない」という補足まで付けている（新新人類、難解の世代？ ; Takin' Bout Their Generation- Today's "New New Youth" ; 003, 1994. 10）。

『光華』は「新新人類」の特徴について、二点を挙げる。一つは批判や反省、いま一つは個人主義である。まず批判や反省について、『光華』は「教師を代える」という表現を使って説明する。すなわち、「政治的に戒厳令が解除されてから、人々の権利意識は高まった。これは、新新人類が成長する過程での重要な社会教育であった。社会の様々な場面で権威的な制度やしきたりやタブーが見直されたり挑戦を受けたりすると、教育の権威を体現する教師もまた権威失墜という問題に直面することになった」（台北人の下一代 ; Youngian Psychology- Taipei's New New Youth; 004, 1994. 10）と。いま一方の個人主義について、『光華』は「台湾の青少年は生活上の責任感が欠けている」と述べる。例えば醒吾商業専門学校に学ぶ劉氏という学生を取り上げて、「彼は自分のことしか関心を持たず、台湾という土地に対して特に興味を示さない」と説明する。『光華』は総評して、「流行をありがたがり、新しいことを言って他人との違いを主張する。これが大都市における新新人類の共通の特徴である」（台北人の下一代 ; Youngian Psychology- Taipei's New New Youth ; 004, 1994. 10）と結んでいる。

『光華』の表現を借りれば、「台湾の新世代は、歴史上ありえなかったほどの豊かで開かれた時代にまさに生きている」（004, 1994. 10）。自己像の内容が台湾中心のものへ変質しつつある不安定な状況において、国家規模の議題に対して批判的であったりそもそも無関心である人々が、新たな世代として登場したのである。つまり、新たな自己像の形成が目指される一方で、「我々」がコンセンサスを持つこと自体を拒絶する雰囲気が、いま一方に存在していた。

こうした不安定で倦怠感の漂う台湾社会に、新たなコンセンサスを打ち出したのが李登輝である。彼は、新たな自己像である「新台湾人」を国民に向けて提起する。このあたり

の様子を『光華』は次のように述べる。すなわち、「このたびのトリプル選挙で、李登輝総統は国民党主席の立場で『新台湾人』の道について言及し、それが島内の四大族群〔四大エスニックグループ〕のコンセンサスをまとめ上げて、国民党を勝者にすると述べている。しかし、中華民国が次の世紀の安和楽利¹⁶⁾のビジョンを邁進するために、『新台湾人』は如何に団結してあるべきか？こうしたビジョンには〔台湾〕内部の環境、兩岸関係、国際情勢〔の三者〕の着実な把握と有機的結合とが必要であり、何よりもまず島内でのコンセンサスの達成が必要である」（従歴史的結晶中凝聚共識；Seeking a Consensus on History；002, 1999.01）と。

いわゆる新台湾人とは何か。李登輝は『台湾の主張』の中で、1998年12月に台北市長候補として遊説中であった馬英九に語らせる形で説明している。すなわち、馬は李に答えて、「私は台湾で生まれ、台湾の飯を食べて育ち、台湾を愛する、新しい台湾人です」と述べたのだった（李登輝『台湾の主張』, p. 263）。同書では李登輝自身の発言（1998年10月24日に出された光復節前夜の談話）をも引用して、さらに詳しい説明を加えている。すなわち、「本日、この土地で共に成長し、生きてきた我々は、原住民はもちろん、数百年前あるいは数十年前に来たかにかかわらず、すべてが台湾人であり、同時にすべてが台湾の真の主人であります。我々は台湾のこれまでの発展に齊しく貢献してきました。さらに台湾の前途には、共同責任を負っているのです。如何にして台湾への愛や同胞への情を、具体的な行動として表現し、台湾の更なる発展を切り開いていくのか。これは、我々ひとりひとりが『新台湾人』として他に転嫁できない使命であります。同時に我々が次代の子孫のために美しい未来図を創り上げて、背負わなければならない責任であります」（李登輝『台湾の主張』, p. 264）と。

『台湾の主張』が掲げた「我々」の自己像は、「新台湾人」である。この自己像を支えているのは、台湾島という一つの土地を舞台にする歴史観であった。これは、従来の自己像と性格が異なるものである。中華儿女にしても、民主中国にしても、中華民国にしても、こうした自己像は、基本的に中国史（あるいは中国国民革命史、中華民国史）を基調にしている。「我々の歴史」は、もともと中国大陆で展開されていた脈絡が1949年の中華民国政府の台湾撤退に伴い、共に台湾島へ流れ込んで展開して現在に至るというふうに設定されている。そこで、「中国人」から「台湾人」への自己像の変質は、「我々の出来事」が台湾海峡を渡って台湾へ流れ込むという中華民国史観から、「我々の出来事」が一貫して台湾島で展開されるという台湾史観へ至るという歴史意識の転換を意味した。

『台湾の主張』（1999）の中で李登輝は、「私はかつて「台湾人に生まれた悲哀」を感じていた。しかし今や、私は「悲哀の歴史ゆえに今日の幸福を持つ」に至った」（『台湾の主

16) 国民党が特に台湾へ撤退して以来、三民主義とりわけ民生主義に基づいて構築を目指した理想の社会状態。安定、平和、楽しく豊かで人々がにぎわうという内容を持つ。

張』, p. 19) と述べている。「私」(李登輝)は歴史意識を転換できたのだろう。ただ、『光華』から『台湾光華』への改称が2006年である事実を踏まえるならば、1999年の段階で「我々」(国民)が歴史意識を転換できたとは恐らく言い切れない。国家元首の発言として考えるならば、『台湾の主張』は歴史意識の転換に関して、どうも先取りしてしまったようだ。

2) 中華民国と台湾とのあいまいな関係

『光華』は、前述の李登輝による「新台湾人」の提起に言及した文章の中で、当時の台湾には歴史の記憶喪失が蔓延していると述べている。すなわち、「最近百年來の台湾の人々のように、これほどまで急に自らの過去と訣別する、そんな国の人々はなかった。これは台湾人が自ら選んだのであった、あるいは短絡的であったというよりも、むしろ台湾の人々が時代という大きな車輪が動く中で、自らを守る際に知らず知らずのうちに歴史の記憶喪失を患ってしまったと言える。(…中略…)台湾は全般的な民主化の中で、ひとまず悲しみの響きからは抜け出したものの、失った記憶の領域を取り戻せていない」(002, 1999. 01)と。

李登輝は「中華民国在台湾」というふうに自己像を表現したけれども、実のところ、中華民国と台湾との関係が明確でないままとなっている¹⁷⁾。中華民国史観と台湾島史観とが予定調和に至らなかったことは、例えば『光華』の日本に関する記事からもうかがえる。

少し時間を遡って『光華』の記事に注目してみよう。「大陸新娘」や海外華僑に関する問題が起こる数年前に、『光華』は日本に関する報道を行っている。ちょうど1989年1月に昭和天皇が死去する。前年末から、日本の輿論は天皇の病状に多大な関心を示していた。これが直接的なきっかけになり、「国内メディアには、日本の天皇の戦争責任に関する議論が繰り返して出現した。(…中略…)国内の少なくない人々が、日本の強大な経済力による文化侵略を恐れている。なぜか？我々の日本情報は多すぎるのか、あるいは少なすぎるのか？我々の日本理解は深すぎるのか、あるいは不足しているのか？今号は巻頭で、この恩愛と怨恨が複雑に絡み合う『日本コンプレックス』を解きほぐしたい」(編者の話；Editor's Note；001, 1988. 12) というものであった。

この時に『光華』が特別に企画して読者に改めて提起したのは、「中国は日本の『兄弟之邦^{くに}』で、同文同種なのか。あるいは『文化的な母国』なのか？」(目録, 1988. 12) という議題だった。『光華』は著名な学者の見解を借り、日本文化の固有性を認めて、中華文化の一部分という考えを退けている(解開日本情結；Understanding Japanese；002, 1988. 12)。

また『光華』はアンケート調査によって、中華民国が持つ日本に対するステレオタイプを紹介する。基本的には賛否両論で、否定的なイメージとしては近代における侵略の歴史、

17) 李登輝は1995年に母校のコネル大学で「民之所欲、常在我心」と題して講演し、「中華民国在台湾」という言葉を使い、自身が総統として代表する国家を表現した。

現代における経済的な侵略が挙がっていた（中国人看日本人；The Japanese in Chinese Eyes；003，1988.12）。中華民国史を背景にして形成される「我々」から見れば、これは当然の結果であったのかもしれない。

だが、『光華』は日本への別の思いにも言及しており、「これとは反対なのは、台湾という第二次中日戦争¹⁸⁾に直接遭遇しないところで、日本人による殺人、放火、略奪を実際に見ていない国民は、若干異なる日本経験を有している」（002,1988.12）と述べている。『光華』のみならず官製宣伝全般において、これはあくまでも傍流の見解である。後に李登輝が言うところの「台湾人に生まれた悲哀」に繋がる論点である。

1990年代中ごろになっても、事情は大して変わらない。中華民国にとって、1995年は抗日戦争の終結からちょうど五十周年目に当たる。『光華』は「抗日戦争の終結から五十周年目に当たり、三千万の中国軍民の犠牲の痛みを思う時、なぜ異なる思いを持つ人がいるのだろうか」（歴史的見證；Bearing Witness to History；002，1995.10）と、問題提起する。『光華』はこれに答えて、「今年は二次大戦の終結から五十周年目にあたり、抗日戦争の勝利と台湾、澎湖の奪還とから半世紀を迎えての記念日である。五十年の時が移り変わったものの、この島に生きる二千一百万人が持つ戦争の印象ははっきりしない。一方で、かつて戦争で大きな傷を負った多くの大陸籍の民衆は台湾へ来た後、時空の変化に伴い戦時の思い出や痛みを多く語らなかった。いま一方で、戦争の時に不幸にも祖国〔中国〕と宗主国〔日本〕との間に挟まれた台湾の民衆にとって、戦争に対する彼ら自身の印象や見方はこれまでほとんど注目されてこなかった。さらに今年になって『抗日戦争の記念というのは中国大陆のことである』と言い出す人があった時、多くの人々は驚き不可解なものを感じたのだ」（走過戦争，走過從前；War and Remembrance；003，1995.10）と述べた。

ここで『光華』は、かつての日本とりわけ日中戦争（第二次世界大戦）をめぐる国内に異なる見方がある、と説明している。つまり大陸の省籍を持つ人々と台湾省籍の人々との歴史観がそれぞれ異なるということである。ただ、基本的には前者の歴史観である中国史の脈絡を、「我々」にとっての主流のものに位置づけている。故に、『光華』は「当時の神州〔自国の美称、つまり中国〕が置かれた状況を描き出すとともに、我々は台北圏を対象にしてランダムに電話聞き取り調査を行い、今日の台湾の人々が持つ日中戦争に関する大まかな印象を簡単に整理した。苦難に満ちた大時代を、そして犠牲になった軍人や民間人を記念するだけでなく、我々は最終的な目標として、皆さんに理解ある目で往年を振り返り、ともに未来を歩んでほしい」（002，1995.10）と主張するのである。

1995年の段階では中国史観を背後に持つ「中華民国」が自己像であり、1996年に李登輝が直接選挙によって総統に選出されて就任し、本土化政策は進んだ。しかしながら、『光華』は1999年に「我々」の歴史の記憶喪失を強く訴えるのであって、「新台湾人」につい

18) いわゆる日中戦争のこと。日清戦争から数えて二度目という意味である。

ては言及する程度である。政権の保守勢力が官製メディアをしっかりと掌握するという通例にもれず、『光華』も急に古い自己像と訣別できたわけでない。その証拠に、2000年の政権交代を経て民進党の陳水扁政権が誕生し、2004年の第二次陳水扁政権の成立、その2年後の2006年になってようやく『光華』は創刊30周年を記念して、『台湾光華』と改称している¹⁹⁾。新台湾人の提唱から、7年が経過していた²⁰⁾。本土化が1990年代から始まるという通常理解に立てば、10年以上の時差があることになる。

要するに、1990年代後半における自己像の特徴は、社会不安を脱却するために新しいコンセンサスとして、「新しい台湾」という自己像が新たに提示されたこと、そして、その自己像は台湾島を単位とする歴史観を背景に持ち成立していたことである。

おわりに

戦後、中華民国の自己像はゆっくりと中国から台湾へ変わる。こうした自己像の変化に、官製の対外宣伝メディアはどのように整合的な説明を加えたのか。本稿では、主に『光華』雑誌（読者は自国民、華僑、そして外国人）の創刊1976年から1999年までの記事に基づき、この問いの解明を目指した。

「我々の歴史」（ナショナル・ヒストリー）の描かれ方に注目して、『光華』の歴年の記事をひも解くならば、中華民国における自己像の変化は次のように説明できよう。すなわち、まず蒋介石が逝き米華が断交したころ、中華民国は自由中国や中華儿女という自己像を持ち、その背後には国民党の中国国民革命の歩みを中心にする中国史観があった。そこでは自己像は、台湾海峡対岸の中国共産党の存在を念頭に置いて形成されていた。つまり、他者を強く意識する性格を持つ自己像であったと言えよう。当時国際的に台湾奇跡と呼ばれたほどの経済発展²¹⁾を背景にして、中華民国は民主憲政という要素も自己像に加えていた。

次に、戒厳令解除（1987年）を契機にして、民主化した中華民国という自己像に変化する。その背後には、中華民国の民主化に焦点を当てた中華民国史観があった。自己像は、自らのプロセス（過去）を内省することによって、すなわち自己の内部を模索することによって形成されている。つまり、自己を強く意識する性格を持つ自己像であったと言えよう。

19) 『光華』は、30年の節目にあたり、「台湾発の情報」を強調するために『台湾光華』へ改称したことを述べている。また、同誌が華人世界を理解するための最良の窓口であることには変わらない、と強調している（編者的話；Editor's Note；002, 2006.01）

20) この7年間に『光華』が展開した議論について、本稿では7年間の時差を指摘するにとどめ、分析は今後の課題としたい。

21) 1人当たりのGNPは、1952年が136米ドル、1970年が384米ドル、1975年が948米ドル、1980年が2293米ドル、1985年が3125米ドル、1988年が6053米ドルとなっていた（若林正丈、1992, p.151）。

二次大戦後の台湾における民主化への参与が、「我々」たりうるための根拠になる。ここから、自己像の再設定と共に社会の不安とが起こった。

そして、1990年代末になると、自己像を新たにし、社会不安を一掃すべく、「我々」のコンセンサスとして「新しい台湾人」が登場する。その登場は時代をやや先取りしすぎた観がある。この自己像の背景には、人々が民主化のために奮闘した二次大戦後のみならず、人々が奮闘した数百年来の台湾島を舞台にする歴史観がある。自己像は、自らの生きる土地の過去を更に遡ることによって形成されている。ただ、自らの所属する国家（中華民国）の過去を更に遡るならば、1949年以前はその源が中国大陆に求めることになる人々も存在する。そのために、中華民国と台湾との関係がはっきりしないまま、「我々」は21世紀へ進むことになった。

中国人像（中華儿女）も台湾人像（新台湾人）も一見すると別々の自己像のようにも見える。しかし、新旧の自己像の背後にある歴史観は、いずれも「二次大戦後における民主化への奮闘」を共有し、これを絶賛している。時系列的に眺めれば、旧来の中国国民革命史観は次第に変化して、「中華民国の台湾における民主化」（中華民国在台湾的民主化）の部分に重点を置くようになる。つまり中華民国史観となる。中華民国の約一世紀にわたる歴史の中で、台湾を認識し重視する発想が形成される。更に歴史を見る目が方向転換し、現在から過去を遡り始める。「中華民国時代の台湾の民主化」（中華民国時代台湾的民主化）を遡ろうとする時、台湾島が歴史の主軸に据えられる。台湾の400年にわたる歴史の中で、中華民国時代を理解する発想が形成される。こうして新しい歴史観である台湾島史は出現したのである。新旧の自己像はいずれも、「我々」が二次大戦後の台湾という時空を懸命に生きてきたことを強調している。台湾への注目というこの点こそが、中華儿女から新台湾人へという「我々」の変化の中に一貫して備わる連続性であると言えよう。

最後に、本稿が残した課題二点を示して今後の展望を述べたい。第一点是对内宣伝との比較であり、第二点はいわゆる台湾島史観の由来である。まず（1）本稿が依拠した『光華』は対外宣伝である。その背後には対内宣伝があり、国家の思想の基調がある。対内宣伝の主旨を踏まえた上で、対外宣伝の内容を意味づける必要がある。初歩的な見解を言えば、対内宣伝はあくまでも強がって主義主張を展開するのに対して、『光華』は時に弱音を吐くこともある。

次に（2）台湾島史観は、李登輝による新台湾人の提起に際して出現したわけではない。1990年に曹永和が「台湾島史」という概念を学界で提起しているし、古くは連横『台湾通史』（1920）、『台湾文化史説』（1930）、史明『台湾人四百年史』（1962）などがあった。在野の歴史叙述にどのようなものがあり、その中の何が参照されて国史（ナショナル・ヒストリー）に吸収されていったのか。これを可能な限り把握する必要がある。

（わかまつ だいすけ・日本学術振興会特別研究員PD、
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研修員）

【参考文献】

- 『光華雜誌』[*Sinorama*] (台北：〔行政院新聞局〕光華畫報雜誌社，1976.01-2005.12)。2006年1月から改称して、『台湾光華雜誌』[*Taiwan Panorama*] (2006.01-)
- アレンド・レイプハルト (2005)，『民主主義対民主主義：多数決型とコンセンサス型の36ヶ国比較研究』(粕谷祐子訳，原著は1999) 東京：勁草書房
- 王丰 (2009)，「蒋介石的最後歲月与真假遺囑問題」『時代教育 先鋒国家歴史』〔月刊。後に「看歴史」へ改称〕2009年4期 (成都：成都日報報業集團，時代教育報刊社)，pp. 76-79
- 王甫昌 (1996)，「台湾反対運動の共識動員：一九七九至一九八九年兩次挑戰高峰の比較」『台湾政治學刊』第1期 (台北：台湾政治学会)，pp. 129-210
- 康寧祥 (1978)，「緊身衣下の民主」(1978年12月) (周琇環，陳世宏主編『戰後台湾民主運動史料彙編 第二冊 組黨運動』新店：国史館，2000)，pp. 159-164
- 周婉窈 (2009)，『台湾歴史図説』〔増訂本〕台北：聯經
- 周明義 (1970)，「我国政府主要对外刊物之内容分析：分析「自由中国評論」兼論我国当前国际宣傳改進之途径」台北：国立政治大学新聞研究所碩士論文
- 蔣經国 (1980)，「国家の基本立場和精神」(1980.06.09) (蔣經国先生全集編輯委員会編，『蔣經国先生全集』〔第12巻〕台北：行政院新聞局，1991)，pp. 176-186
- 蔣經国 (1967)，『風雨中的寧靜』台北：国防部实践講習班
- 蔣經国 (1978)，「民国六十七年十二月十六日獲悉美国政府承認匪偽政權並斷絕與中華民國關係後向全国同胞發表談話」『總統府公報』第3448号 (1978年12月18日) (蔣經国先生全集編輯委員会編，『蔣經国先生全集』〔第13巻〕台北：行政院新聞局，1991)，pp. 24-26
- 蔣中正 (1975)「蔣公遺囑」(秦孝儀編『(先)總統 蔣公思想言論總集』〔第35巻〕台北：中国国民党中央委員会党史委員会，1984)，p. 292
- 張超英 (口述)，陳柔縉 (執筆) (2006)『宮前町九十番地』台北：時報出版
- 陳鴻瑜編 (2000)，『中華民國之僑務政策』台北：中華民國海外華人研究学会
- 李登輝 (1999)『台湾的主張』台北：遠流。日本語版は，李登輝 (1999)『台湾の主張』東京：PHP研究所
- 林秀芬 (2010)，「海外宣傳刊物中台灣的文化圖像：以『光華』雜誌為中心 (1976-2005)」台北：国立台湾師範大学歴史学系在職進修碩士論文
- 若林正文 (2008)，『台湾の政治：中華民國台湾化の戦後史』東京：東京大学出版会
- 若林正文 (1992)，『台湾：分裂国家と民主化』東京：東京大学出版会
- 若松大祐 (2010)「戦後台湾蔣中正時代の官方歴史叙述：從民主陣營到民主憲政」(曾一士総編『中山思想與兩岸社会文化發展』台北：国立国父紀念館)，pp. 167-192